

3) 冠詞をさかのぼる

(月刊『言語』大修館 2003 年 10 月号より転載) 工藤 進

1 冠詞の発生

フランス語作家ルクレジオの作品に、「砂漠」と翻訳されているものがある。この翻訳から予想されるフランス語タイトルは Le desert だが、実際は冠詞なしの Desert。この語には「砂漠」のほかに「無人の」という意味の形容詞もあり、こうして無冠詞で用いられた場合のニュアンスは複雑だ。

冠詞 *articulus* はもともと「節、(文の)構成要素」という意味だが、「冠」という日本名の示す通り、名詞に前置され、名詞を限定する役目を果たす。フランス語では限定の程度が強いものが定冠詞 *le, la, les* であり、漠としたものが不定冠詞 *un, une, des* である。部分冠詞 *de* (+定冠詞) は定冠詞を含むが、意味は不定冠詞的である。冠詞は一般に具体的意味よりむしろ、文法的はたらきを表わし「道具語」などと呼ばれるが、こうした道具は大昔からは存在せず、ラテン語文法に「冠詞」と呼ばれる項目はない。

ラテン語やサンスクリット語と違いギリシャ語文法には、古い指示詞のなごりである冠詞 (*ho, he, to*) がある。ホメーロスのギリシャ語にすでに、冠詞本来の用法は見られるが、多くは指示代名詞、時には名詞の後に置かれ関係代名詞のように使われている。ホメーロスの言語を遡るミュケーナイ語に冠詞は見あたらない。ギリシャ語冠詞のもとにあった指示詞は英語の *this, that, these, those* と同じ語源である。すなわち定冠詞 *the* も含め、サンスクリット語指示代名詞の *tad-* の変化形、およびそれと同根の古ゲルマン語 *thata* につながる。古いギリシャ語でもサンスクリット語でも、冠詞(指示詞)が後置されることがあるが、冠詞の起源はもともと、指示的 (*deictique*)、反復的 (*anaphorique*) 小辞なのだから当然である。

印欧語の歴史は、始源の均衡状態に、なんらかの変化の力が加わった結果、意味と形がお互いに影響を及ぼし合いながら描く絶えざる改変の軌跡である。声で伝達されてきた言葉に、文字が介入したことも言葉の方向が変わる大きな要因となった。表記法はヒッタイトやエジプトの表意的古代文字から、ミュケーナイ時代の線文字(日本の仮名に似た音節文字)をへて、表音的アルファベットに到ったが、ヨーロッパ人の言語思考は声とその余韻とが支配する神話的反復世界から、ロゴスの視覚的定着を軸とする分析的省察の場に移った。指示詞から生じた冠詞は、こうした改変にさらされた「形態」側が、意味の明確化の要請に応じて生み出した工夫の一つと言える。

ラテン語にはいわゆる冠詞と呼ばれるものはない代わりに、男性形で言えば is (その、それ)、hic (この、これ)、ille (あの、あれ) という指示詞があり、後世の定冠詞の役割を果たすことがあった。名詞に指示的小辞が付く事はラテン語の起源にまでさかのぼる習慣である。主格・属格をあらわすとされる -(e)s 語尾 (dominus の -s) は、もともと独立した指示的小辞であつたらしいから、格語尾の原義も最初はおそらく単なる指示的なものであつたと推定される。指示詞は反復詞でもあり、反復詞は強調 (あるいは緩和) に用いられが、発音が磨滅するとかで指示機能が弱まると冠詞的なものになるのである。

フランス語の定冠詞 le, la, les はこのようなラテン語指示詞の中の ille (男性対格形 illum, 女性対格形 illam, 複数対格形 illos, illas) から生まれている。新しい言語 (フランス語) に変わる過程において、古典ラテン語の厳密な、語尾による格変化や活用が磨滅、単純化し、あるいは性や数の標示方法があいまいになった。ラテン語指示詞は、本来の指示機能から、こうした変化に対応し、弱体化した機能に変わる新しい限定方法 (冠詞) として用いられていく。フランス語のごく初期においては冠詞の使用範囲は限られていたが、十一、二、三世紀と時代が進むにつれその使用は拡大される。さらに男性主格を表す名詞の -s 語尾などが発音されなくなったり、単数、複数といった数を表現するのに語尾の発音に頼ることができなくなったり、あるいは女性形語尾としての -e (本来は -a) が無音化されるようになってからは、冠詞の使用はそれら消えた形態のはたらきになるものとして必須になっていく。十六世紀になると冠詞使用はフランス語において定着した。

フランス語の冠詞が、ラテン語の消えつつあった文法形態に代わって発生したとする考えは、因果関係が明らかでわかりやすいが、事態はそれほど簡単ではない。古典ラテン語で名詞を指示詞で強調、反復することがあったように、俗ラテン語でも、まだしっかりしている語尾の果たすべき目的 (例えば語の複数化) に、同じ目的の複数指示詞 (つまり複数冠詞) を重ねて用いることも珍しくなかったろう。ギリシャ語では、アッティカ方言が文法的簡潔性に優れていたにもかかわらず、ホメーロス時代の総合的指示詞を冠詞、指示代名詞、関係代名詞などと分化して制度化し、古い機能を一つも捨てていない。こうしてみると、冠詞は、そうしたはたらきをするものが消えていったから生まれたとする考えは的を射たものではないかもしれない。公文書などで意味保全のため、二重三重の安全装置を用いることもあったフランス語で、冠詞の使用が決定的になってはじめてさまざまな文法語尾を無用として捨て去ることができたとも考えられる。冠詞のもつ機能は冠詞と共に生じたのではなく、冠詞発生以前から、すでに別の方法によって担われていたのである。

2 強調辞としての指示詞

印欧語冠詞の起源は指示詞にあると述べたが、サンスクリット語の指示代名詞 tad- (男性主格は sah) は、辻直四郎博士によれば、「既述のものを振り返って指示し、意味の強いときは、「前述の、周知の」に相当するが、意味の弱いときは三人称の代名詞の役割を果たし、名詞と結合して定冠詞の機能を持つ」(『サンスクリット文法』岩波書店)。これはホメーロスのギリシャ語においても同様である。さらにサンスクリット語では指示代名詞と呼ばれているものが、他の指示代名詞、あるいは人称代名詞に前置され、その代名詞の意味を明確にする。sa tvam 「そのお前」、so'yam (= sah ayam) 「このこれ」、so'ham (= sah aham) 「このおれ」。フランスのルヌーは so'ham を「私自身、ここにいるこの私」と解し、十九世紀前半に有名な『印欧語比較文法』を著したフランツ・ボップは hic ego、つまり「ここのこの私」と解した。こうした指示詞が強調辞として用いられる傾向は他称(三人称)代名詞とは限らない。ピエール・シャントレーヌ(『ホメーロス文法』第二巻)は、古いギリシャ語では、二人称単数代名詞の su も「(de, ge といった強調辞と一緒に)とくに命令法と共に用いられ、代名詞ではなく、述部あるいは節全体に注意をひく」場合があることを代名詞項目の冒頭に特記している。古典語において人称の観念は動詞の語尾変化で表わされるのがふつうである。代名詞(とくに一・二人称)の使用は、主部より対応する述部を目立たせようとするすることがあり、そのニュアンスは、いま述べた指示代名詞のついた人称代名詞の意味に近いものになる。辻博士は so'ham は、「そのような私は、それゆえ私は」と解することができるとした(前掲書)。

これら「そのお前」、「このこれ」、「このおれ」、「私自身、ここにいるこの私」、「ここのこの私」、「そのような私は、それゆえ私は」といった少々ぎこちない表現はすべて、「お前は、これは、おれは、私は」というように、日本語では助詞の「ハ」を用いて簡潔優雅にあらわすことができるのである。

3 冠詞と「ハ/ガ」

主格に用いられる定冠詞は日本語のハ、不定冠詞はガにあたる、と考えることができる。前置される冠詞と後置される助詞という見かけ状の違いは大きく、また、印欧語と日本語との系統関係が先験的に排除されている現在、冠詞と日本語助詞とのこのような機能の類似を、実際の生成の関係にまでさかのぼらせる事はむずかしい。しかし前置や後置の違いはたいした違いではなく、前置詞の多くが独立した副詞であった古典語において、指示詞の後置は少しも珍しいことではない。ルーマニア語やハンガリー語のように、現代ヨーロッパ

の言語のなかでも格関係の表現に、日本語の助詞のような後置される小辞を用いる言語は少なくないのである。

さらに人間の系統に関して言えば、現代人のアフリカ起源はほとんど確かであるといっている。現代人（新人）の先祖が今から二十万年から十万年前の間にアフリカに発生したという遺伝子学からの情報は、最近、旧人と新人とをつなぐとみられる十六万年ほど前の人骨がエチオピアで発見され、ますます信ぴょう性を増した。その間、印欧語そのものの分析は進んだが、旧来の比較言語学の方法論では日欧の言語の系統関係までさかのぼることはできない。遺伝子研究による人類系統論ではヨーロッパと極東との分離は今から三万五千年から四万年前だが、スタンフォード大学の言語人類学者グリーンベルクによれば、日本語を含む極東語も印欧語も同じ一つのユーラシア語からもっと近い時期に分離したとされている。一万年続いた縄文時代をもつわれわれにとって、その時期は途方もなく遠い昔ではない。

4 属格から主格へ

印欧語の定冠詞と不定冠詞、また無冠詞の扱いは、日本語常用者にとって極めてやっかいだ。これはフランス人にとって助詞、とくにハ、ガと無助詞の扱いに練達することがむずかしいことと通じる。日本語には安定した主格観念はなく、その標識はあいまいだ。松本泰丈は琉球日本語の格助詞ガ、又について「名詞＋ガ、名詞＋又に関しては、一般言語学的にも、古代日本語の例にてらしても、主格用法より属格用法のほうが古い」と述べた（「能格」現象と日本語、「解釈と鑑賞」1990）。日本語では「我ガ君」という表現が「我ぎも子ガ結びし紐」（万葉集 3717）より古いらしい。「吾ガ（泣く）なみだ」（万葉集 177）などでは、ガの主格表現は属格表現から生じているようにみえる。印欧語でも属格は主格に先行している。主格指標の *-s* は指示詞起源の *-(e)s* であり、それが主格にも属格にも、ときには複数にも用いられた。

日本語主格は無標識がふつうだが（昔、男ありけり。その男...）、現代語では「ガ」が印欧語の不定冠詞のように用いられる一方、「ハ」は定冠詞的に用いられる。「昔、ある男ガいた。その男ハ... *Il etait une fois un homme. L'homme ...*」であり、「ある男ハいた。その男ガ... *Il etait une fois /l'homme. Un homme ...*」ではない。総称に用いられるのも無標識か、「ハ」であり、定冠詞である。「海（ハ）青し *La mer est bleue.*」。

「（あなたではなく）私ガ歌う」、「私ハ（弾くのではなく）歌う」のように、ガはそれが付いた名詞を、ハは述部を特立するために用いられる。しかし日本語常用者が印欧語の冠詞使用にまごつくことがあるのは、「私、歌います」のよう

な、所有も被所有も、主部も述部も特立されない古くからの並列語法（ワエ＝我が家、ワホ＝我が方、ワ・ク＝我食う、秋田鹿角方言）が現在でも行われていて、常に主部、述部の因果関係、軽重判断を伴う観念を構築することには慣れていないからだろう。日本語の助詞なしの言述では情報自体の合理性より、自分の主観を伝えるか、相手に情報の判断をまかせることを優先しているようである。西洋でも、ホメーロスのギリシャ語などにはこうした同質の共同体としての限定無用、近代的文法律無用の感覚がある。

5 「ガ」の起源

さて秋田県北部の日本語では、助詞のガは鼻音で発音される。古い人称代名詞ワ（吾）、ガ（鼻音、汝）を用いるときは、格助詞ガは主格にも属格としても使わない。「ワ・読む、ガ・読む」である。オレを用いるときは「おれ（ガ）読む」だが、ガの使用は奨励されない。自己特立が強すぎるからだ。この助詞ガの発音は対称（ときに自称）代名詞に用いられる鼻音のガ（汝）と同じであり、起源も同じであると私は確信している。nga は恐らく na にさかのぼる。

助詞は日本語の始源から機能（道具）語として存在したわけではない。一般的に副詞起源が多い前置詞と同様、日本語の助詞も他の独立詞からの転用が多い。大野晋は日本語格助詞ガの起源として八世紀に ga という音価を想定し、タミル語の akam, aka という小辞と結び付けている（「日本語以前」岩波書店、1987年）。確かに -g/-k という交通は自然だが、奈良時代の格助詞ガの発音が ga ではなく、現代の東北地方の発音の nga、あるいは na というものであったら、この比較はどういうことになるのだろうか。橋本進吉は奈良朝時代の日本語について、「（長崎、釘などの）ガ行子音 -ng は当時はなかったのではあるまいかと思はれる」（「国語音韻の研究」岩波書店、1950年）と述べたが、中国語の音韻研究から奈良時代の日本語の音価を推定させるカールグレンによれば、助詞ガの転記によく用いられる「我」は nga である（J.L. Pierson 「The Manyoshu」ライデン 1929年）。

有坂秀世は没後刊行された、「国語音韻史の研究」（三省堂、1957）のなかで、印度僧から梵語の読法を習得した慈覚大師（円仁）の在唐記を引用している。それによれば、梵語のガ（喉音無気音 ga）は「本郷我字音」、梵語ナ（喉音鼻音 na）は「本郷鼻音之我字音」である。「本郷」（つまり日本、円仁は下野、栃木の人）には鼻音のガがあり、それは梵語の喉鼻音 na に近かったのだ。

格助詞のガはもともと鼻音の nga であり、それを遡ると na に行き着くのではないかというのが私の推定だ。この na は、港（みなと）、眼（まなこ）の属格助詞のナであると同時に人称代名詞のナでもある。助詞と指示代名詞とのつ

ながりは一見奇矯だが、これまで述べた印欧語では指示代名詞は冠詞と結び、その機能の一端は日本語では助詞で表わされているのである。助詞機能は一般に代名詞機能より新しい、とすれば、もとにあったのは指示機能をもった小辞ということになる。北秋田の代名詞 nga (汝) は青森の一部では「ナ」として保たれているが、「風の又三郎」草稿に見る限り、岩手の花巻などでは「ウナ」として保存された。

この (n+ 母音) とは一体何か。泉井久之助(「印欧語における数の現象」1978 大修館) によれば印欧語の代名詞の主要語幹は we-, ne-, yu-, me- の四つ。このうち ne- に関係するものは、泉井によると、一人称複数代名詞として、ラテン語 nos、古代ギリシャ語 ammes (< as-mes < ns-mes)、一人称双数として、イラン・ガーサー語 na、古代ギリシャ語 no。そのほかサンスクリット語の一人称双数付帯辞形 nau、一人称複数付帯辞形 nah を付け加えることができる。これらはすべて一人称の双数、あるいは複数形だが、印欧語最東端のトカラ語には一人称単数代名詞の語幹として na- がある。日本語の二人称単数ナ(汝) はこれらの代名詞と人称が違うが、ナは古くは二人称ではなく一人称代名詞だったという説がある。

冠詞は日本語助詞につながりうることをのべたが、日本語を印欧語に結ぶ鍵がこうした指示詞にあるとする考えが近々、フランスの印欧語学者 J.P ルヴェ氏によって「東西」6号(リモージュ大学)に発表される。

(明治学院大学文学部・言語論)